

地域経済研究センター
調査研究報告書 No.7

市民参加型のまちづくりとは何か

—佐賀市の市民ワークショップの事例から考える—

2001年3月

佐賀大学経済学部
地域経済研究センター

はしがき

この報告書は、佐賀大学経済学部地域経済研究センターにおいて、昨年が続いて実施した共同研究「市民参加型のまちづくりとは何か」の第2報告である。

昨年の報告では、今日多様に展開されている「市民参加のまちづくり」について、代議制民主主義の下で、市民参加という直接民主主義が注目されている現状をいかに捉えるか、住民参加の背景と参加の形態を検討し、全国的な参加事例とその類型化を試みた。あわせて、地元紙の佐賀新聞記事データベースから佐賀県において展開されている具体的事例を整理した。

本年度の研究は「まちづくり」の基本方向を提示する「総合計画策定」について、佐賀市における実践事例を中心に検討した。かつて、いわゆる「マスタープラン」と呼ばれる自治体の総合計画は、コンサルタントまかせに作文されたり、市民参加とはいえ一部の名望家や業界代表の策定委員への参加、アンケート方式による住民の声の収集といったことにとどまっていた。しかし、この数年、さまざまな手法と多様な市民の参加によるマスタープランづくりが各地でみられるようになった。

今回の佐賀市総合計画策定においても、市民の自主的参加（公募）とワークショップという手法によって、一歩進んだ市民参加の総合計画づくりが行われた。本年度の報告書では、策定の過程に携わった参加者にアンケート調査し、さらに参加された市民の声を直接聞くとともに、裏方として作業に加わったコンサルタントの考え方を集録した。

市民の方々の一部には、さらに自主的に「まちづくり」を考えるグループ活動を展開されていると聞いている。佐賀市総合計画の策定という一つの事例を中心に取りまとめたが、具体例の中から、市民参加の制度化や運営方法などを学びとり、将来への展開の手がかりにしたいと考える。アンケートにお答えいただき、また直接にお話を聞かせていただいた方々、また、コンサルタントとしての役割などを解説していただいた（財）九州調査協会の内田さんには、紙面を借りてお礼申し上げます。

2001年3月

研究者代表 蔦川 正義

目 次

第1章 佐賀市における市民参加に関するアンケート結果	1～11
1. 社会的属性	
2. 市民参加の経験	
3. ワークショップ方式について	
4. 報告書について	
5. 市民参加について	
6. 市民参加の課題	
資料 アンケート調査票・単純集計	
第2章 市民参加の一手法について ～佐賀市総合計画策定における市民ワークショップを事例として～	12～19
はじめに	
1. 市民参加の一手法として	
2. 佐賀市の市民ワークショップについて	
第3章 「佐賀市のまちづくりを考える会」の部会長・副部会長との 懇話会記録	20～25

執筆・取りまとめ担当

第1章	畑山敏夫（経済学部教授）
第2章	蔦川正義（経済学部教授）
第3章	長安六（経済学部助教授） 池田智子（経済学部助手）

第1章 佐賀市における市民参加に関するアンケート結果

佐賀市は、第4次佐賀市総合計画の策定過程において、広く市民から公募したワークショップによる「佐賀市のまちづくりを考える会（以下、考える会）」（95名）を組織し、総合計画へ市民の意見を反映させるという初めての試みを行った。そこで、考える会に参加した市民のワークショップ方式による参加型まちづくりに対する意識や関心の度合いを明らかにするために、アンケート調査を実施した。以下は、回収された回答（57名、回収率60%）の分析結果である。

1. 社会的属性

回答者の属性については、男性・女性がほぼ半数ずつであった。一般に市民参加においては、女性が圧倒的に多い事例が目につくが、このケースでは男性が積極的に多いことが興味深い。

年齢については、やはり予想通り、若年層の参加が低調で、中年および熟年層の積極的な参加が顕著である（図1）。都市部に比べれば時間的なゆとり、特に、職住接近で移動時間も短くてすむ佐賀市くらいのヒューマンサイズな規模が男性の参加に適していることを示しているのかもしれない。

居住歴においては、20年以上の長期居住者が過半数以上を占めている。居住歴の長さは、郷土に対する愛着を強め、市民参加のモチベーションになっていると解釈できる。特に、男性の場合は居住歴が長く、男性の参加の多さが、そのような要素によっても説明できよう。

職業に関しては、主婦や退職者という、時間のリソースを有するカテゴリーの多さは当然であるが、意外にも、会社勤務および会社経営のカテゴリーが多い（図2）。そのような社会職業層は時間の面から参加が困難と予想されるだけに、居住歴の長さや愛郷心の強さといった前記の要素が作用していると考えられるが、佐賀市におけるそのような層の市民参加への積極性は興味深い現象である。

図1 年齢

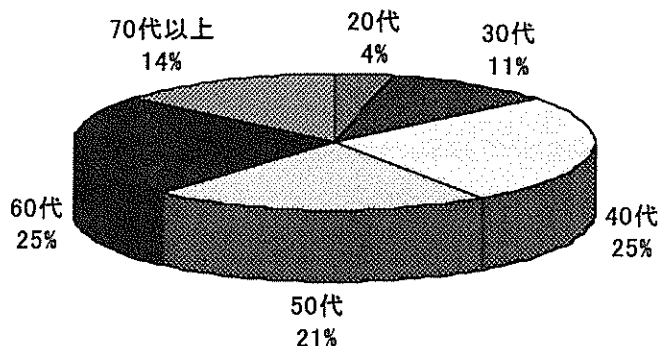
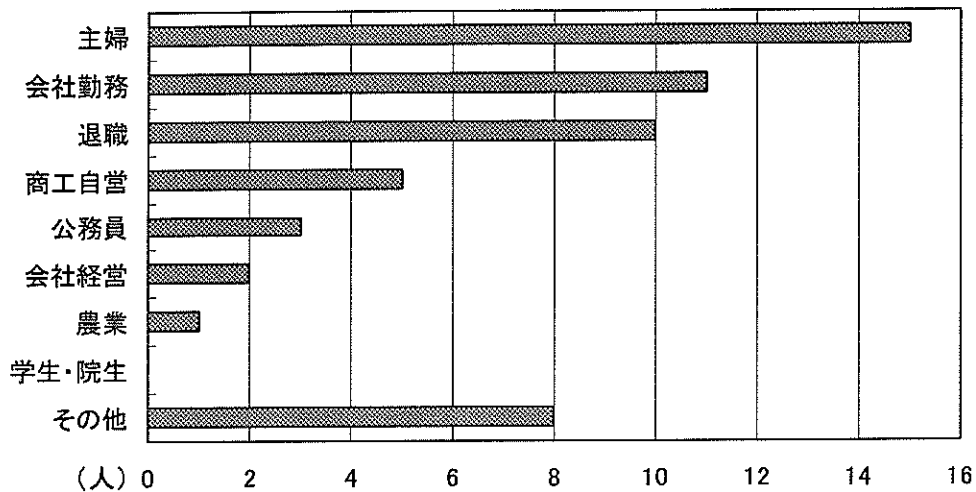


図2 職業



2. 市民参加の経験

市民参加の経験については、従来、市民運動やボランティアを経験してきたアクティブな市民層が多いことは予想された通りである。市民参加は、このような意識の高い市民層が中核によって担われるのであり、その自治体での市民運動やNPOなどの活発さが、市民参加の鍵となると言えよう。また、活動はともなわれないにしても、市民参加に関心をもってきたり、市民運動やボランティア活動を会員として支えてきた市民が多いことを加味すれば、市民参加の活発化は、社会的空間への関心と相関関係をもつことが認められる。

また、「佐賀市のまちづくりを考える会」への参加動機においては、市民参加の必要性についての認識（45.6%）による参加が目立ち、公共空間への市民の参画を理念的に理解した成熟した参加意識が認められる。そして、佐賀市の考えに共鳴しての参加（22.8%）が次に多く、行政の側が、従来の閉鎖的な政策決定の姿勢を転換することが、市民の側の市政に対する積極的な協力を引き出す鍵になることを示している。

3. ワークショップ方式について

ワークショップという方式についての評価であるが、概ね好意的に評価されている。自由な意見交換のおもしろさがトップで（68.4%）、班単位の活動の有益さ（22.8%）、具体的課題に取り組む充実感（26.3%）といった回答も含めて、具体的な課題について、参加者の自由で濃密な議論を保障するワークショップ方式の利点を確認できる。ただ、運営の中で、多くの不満があったことも確かである。その最大のものは、時間の少なさである（表1）。第4章の懇話会記録のなかでも、出席者のなかから「最初から回数が4回で、いつまでに

提案をださなきゃいけないというスケジュールが決まっっていて、それでは時間が足りませんでした」という発言があった。市民参加の方式としてのワークショップ方式としては、結論に至るまでの議論にどれだけの時間を設定するか、議論の時間が十分でないとしたらどれだけ延長するかという点でも、市側のスケジュールにそって運営するのではなく、ある程度は市民の自主的判断にゆだねることが必要であろう。せっかくのワークショップ方式も、そのような運営の基本の部分で参加者のコンセンサスや主導権を保障しなければ、言い放しになったり、スケジュール消化に陥ってしまう危険性もある。

また、ワークショップの進め方についても、「市民がやるべきこと」と「行政がやるべきこと」の分類や「早急にやるべきこと」と「中長期にやるべきこと」の分類など、議論の前提部分が十分に参加者に理解されているとは言えない。そのような基本的枠組みの部分で、コーディネーターと参加者の基本的了解が不十分であったようだ。

いろいろな人の存在を知ることができたり、多様な意見が聞けたりと、今回の企画が参加者にとって有益であったことは否定できない。ただ、このような方式は、日本ではまだ普及し始めたばかりであり、参加者のこのようなやり方への習熟が必要であろうし、今後のためにも、参加者の感想も含めて、具体的な運営の検証と改善が必要である。

表1 ワークショップ方式に対する不満

不満の内容	回答数	%
時間が足りなかった	13	42%
行政・コーディネーターの対応	11	35%
参加者の資質	7	23%
ワークショップ方式そのもの	3	10%
無記入(4)		
回答数	31	

設問3)の自由記入欄に書かれた内容より作成

4. 報告書について

報告書については満足が過半数に達していない。随分と工夫の見られる報告書ではあるが、その作成の過程にも参加者の声が反映されているのだろうか。報告書の作成は、市民参加の大事な仕上げの過程であるが、その点が軽視された観が否めない。一部の責任者だけではなく、参加者の意見を聞きながら作成する作業が必要であろう。そのためには、報告書作成も、ワークショップの作業にゆだねるという方法もあるだろう。

5. 市民参加について

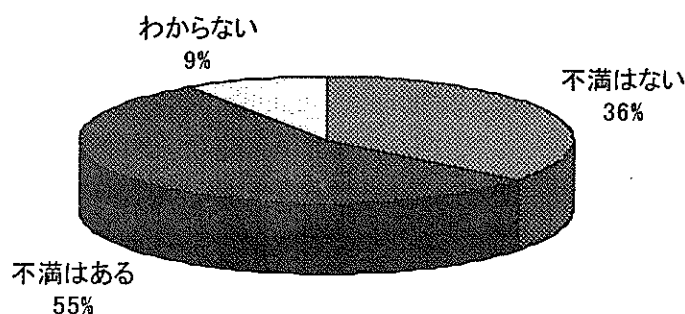
市民参加については、「佐賀市まちづくりを考える会」の恒常化と市民参加の拡大が多い

回答であった（51.8%と60.7%）。同会の実践を通じて、参加する市民の核が形成され、ワークショップ方式での作業を経験した。考えてみれば、そのような経験を今後に生かさな
いのは、もったいないことである。今後は、同会の専門的な班による作業の深化もとも
ないながら、市民によるまちづくりの核組織として育てていく価値はあるだろう。今回の経
験は、行政への理解が深まった（8.8%）、行政とのパートナーシップのきっかけ（35.1%）
という回答からも、行政のよき理解者、パートナーとしての市民を育てることに貢献して
おり、市民が相互に意見を交わす経験や異なった意見や発想に触れる機会として、市民自
身の成長にもつながるはずである。

また、今回の市民参加のある程度の成功から、市民は行政に参画する意欲と能力を十
分もっていることが証明されており、今後は、まちづくりだけではなく、他の行政課題
にも市民参加を拡大する可能性が検討されるべきであろう。今回の試みは初めてのもの
であり、参加者の中には、様々な不満が存在しているのも確かであり（図3）、今後は、そ
のような参加者の多様な声を吸収して、運営の仕方を工夫することが必要である。特に、日
本の場合、教育や社会生活の場で、他者と議論をし、結論へと至るプロセスに習熟する機
会があたえられてこなかった。例えば、先行する意見に対して議論をかみ合わせ、具体的
提案を積極的に提示する努力は、議論の経験を積むことでしか取得されないだろう。その
意味で、市民参加の中で、市民の成熟にこそ大きな意味があると言えよう。

今後の佐賀市が取り組む課題についても、多様な意見やアイデアが提示されている。そ
のような意見やアイデアをもつ市民の存在は、佐賀市にとっても貴重な財産であろう。市
政に関する積極的な情報の提供・公開を前提に、建設的で実現可能な意見を市民に求める
機会を増やし、市民とのパートナーシップのもとに、その実現を追求する柔軟な行政運営
が求められる。その点では、各課題に対応した市民プロジェクト・チームの設置や、各地
域において住民が参加する常設組織を育てる努力も必要であろうし、そのような市民参加
の恒常的組織化の他にも、佐賀市における重要な政策課題について住民投票による決定を
盛り込んだ「市民参加条例」がつくられて、散発的な市民参加から制度的な市民参加への
質的発展が追求されるべきであろう。

図3 全体として今回の市民参加に不満があるか



6. 市民参加の課題

最後に、佐賀市での今回の市民参加の事例と絡めて、市民参加についての一般的な結論と今後の課題について述べておこう。

市民参加については、3つの課題が指摘されている¹⁾。第1は、住民・市民参加機関が地域住民の同意調達や行政との調整をはかる際、その機関に果たして代表権や代理機能が認められるかという問題である。今回の佐賀市の場合は、委員は市の相互計画策定という、ある意味では特定の利害関係を反映しない総論的な課題をめぐる参加であり、委員の選定も公募方式で集められており、住民からの同意調達は問題にならないであろうが、特定の事業をめくって市民参加の方式が踏襲される場合、利害当事者の参加も含めて、市民参加の方式はさらに工夫される必要がある。

また、行政との調整については、市民参加の実践を積み重ねるなかで、市民の側においては、行政に対する市民の認識や信頼が高まり、規範意識や相互信頼が醸成され、行政の側においても、市民参加についての認識を深め、その過程についても習熟するなかで、市民を対等なパートナーとして位置づける意識変革が進行していこう。そして、市民参加の定着と信頼性の獲得によって、議会側も、市民参加の手法を、間接民主主義を補完する優れて現代的な問題解決手法として受容する風土が育っていくだろう。

現代の複雑化し多様化した行政課題が山積するなかで、間接民主主義の手法や行政の専断的手法は限界に来ていることは一般に認められている。市民参加の経験の蓄積とその制度化によって、市民参加の機関が正統性を獲得し、市民の間のコンセンサスを形成する手段として政策形成・決定過程に組み込まれることは、行政の問題解決能力を高める有効な方法であろう。また、間接民主主義を補完する手段としての市民参加の直接民主主義の手法の定着は、議会制民主主義の信頼性を高める効果ももたらさるだろう。

第2に、参加意欲を持続させ、住民側リーダーおよび活動的メンバーの継続的育成をいかにして可能とするかという問題である。各地の成功した市民参加の事例をみても、市民参加の過程においては、優れたリーダー（およびサブ・リーダー）と専門家・知識人などの役割は重要である。そのようなリーダーは、自主的な市民運動、NPO、既成の町内会などの自治組織などから調達される場合もあるが、行政が養成講座などの企画を通じて意識的に人材育成することも必要であろう。また、そのようなリーダー層が、自生的に育ってくるような環境づくりのために、地域コミュニティの再生や市民運動、NPOの活動助成など、間接的な支援を行うべきであろう。

第3に、行政との良好なパートナーシップや信頼関係をいかに構築するかという課題である。これは第1の課題ともオーバーラップするが、日常的な市民と行政との協働関係の構築にむけた、継続的努力が必要である。その時、重要なことは、従来の上意下達型の意識を行政が克服して、市民参加の手法を行政の政策決定の正当化やアリバイ的な手段として利用するのではなく、行政は、市民参加の補助的役割に徹するという意識を修得していくことである。長年の権威主義的で閉鎖的な行政イメージが確固として存在していることは事実であり、首長や職員の意識改革を始めとした行政の体質改善なくして、市民参加は

進捗しない。

さて、以上のような観点からすれば、今回の市民参加の実践はどう評価されるだろう。市民が公共空間のデザインに参画し、新たな公共空間が形成され、公共意識が涵養されるような市民参加の過程は、まだ、始まったばかりであろう。最後に、繰り返しになるが、市民が当事者として公共空間に積極的に参加するためには、佐賀市だけの課題ではないが、情報公開を始めとした「開かれた行政」への脱皮など、行政の体質の一層の転換が望まれる。

また、日本社会全体から言えば、公共の空間に参加するために現在一番欠けているものは時間的資源であろう。市民参加の現場を観察すると、男性サラリーマンの姿が見えないのが現状である。公共的な事柄に興味を持ち、知識や情報を収集・分析し、具体的な市民参加の過程に参加するためにも、労働時間の大幅な短縮が必要であろう。日本社会は、世界でも恵まれた経済的豊かさを享受している。そして、教育レベルも高く、情報へのアクセスも容易な社会である。その意味で、市民参加にとって有利な環境が整っている社会と言えよう。上記のような条件を満たし、市民参加の経験を蓄積していけば、真の意味での質的に豊かな社会の実現は十分可能であろう。

i 早川純貴「市民参加の政治過程－市民と行政の協働に向けて－」『駒澤大学法学部研究紀要』第59号、109頁。

佐賀市における市民参加に関するアンケート調査票

性別	1. 女性	2. 男性		
年齢	1. 20～25歳	4. 36～40歳	7. 51～55歳	10. 66～70歳
	2. 25～30歳	5. 41～45歳	8. 56～60歳	11. 70歳以上
	3. 31～35歳	6. 45～50歳	9. 61～65歳	
佐賀市の居住歴	1. 0～5年	3. 11～15年	5. 20～25年	7. 30年以上
	2. 6～10年	4. 16～20年	6. 25～30年	
職業	1. 会社勤務 2. 商工自営 3. 農業	4. 主婦 5. 学生・院生 6. 公務員	7. 退職 8. 会社経営 9. その他（	）
市民参加の経験	1. これまでも市民参加について関心があった。 2. 活動は特にしていないが市民運動やボランティア活動などの会員である。 3. 市民運動やボランティア活動に積極的に参加してきた。 4. その他（			

1) あなたが「佐賀市のまちづくりを考える会」に参加された動機は何ですか。自分が参加するに際して最も考慮した動機1つをお答えください。

1. 日頃から個人的に佐賀市のまちづくりに不満をもっていたから。
2. まちづくりの過程に参加することが面白そうだったから。
3. まちづくりには市民の参加が必要だと思ったから。
4. 市民からの公募という佐賀市の考えに共鳴して。
5. その他（

2) 実際にワークショップの作業に参加して、このような方式のよさとして最も感じたことは何でしたか。2つまでお答えください。なお、「その他」に2つ書いていただいても結構です。

1. 参加者の意見が自由に交わされておもしろかった。
2. 班単位の活動が有益であった。
3. 具体的な課題に取り組んで充実感があった。
4. 市側からの様々な情報提供があつてよかった。
5. 応用紙に書き込んでいく方法がよかった。
6. 意見のとりまとめがうまくいった。
7. その他（

3) 今回のワークショップの方式について、どのような点に不満がありましたか。不満があれば、具体的な内容をお答えください。

1. 不満はなかった。
2. 不満があった。
3. わからない。

4) ワークショップの作業の成果である報告書についてお聞きします。あなたは、この報告書について満足していますか。不満があれば、具体的な内容をお答え下さい。

1. 満足している。
2. 不満である。
3. わからない。

5) 市民参加について、今後佐賀市はどのような施策をすべきだとお考えですか (複数回答可)。

1. 「佐賀市のまちづくりを考える会」を恒常化し、報告書の内容の実施状況を報告すべき。
2. 佐賀市総合計画策定の作業以外でも市民参加の方式を広げるべき。
3. 市民参加条例のような条例をつくり市民参加の制度化をはかるべき。
4. 地域に常設の市民参加の組織を設けるべき。
5. その他

6) 今回「佐賀市のまちづくりを考える会」に参加して、全体として最もよかった点1つをお答え下さい。

1. 佐賀市の行政への理解と信頼が高まった。
2. ワークショップ方式のおもしろさが経験できてよかった。
3. いろんな市民の意見が聞けて有益であった。
4. 市民と行政のパートナーシップのきっかけができた。
5. その他

7) 反対に、全体として今回の市民参加で不満に感じた点はありますか。不満があれば、具体的な内容をお答えください。

1. 不満はない。
2. 不満はある。
3. わからない。

8) 今後、佐賀市に力を入れてほしい課題があればお答えください。

どうもご協力ありがとうございました。同封の返信用封筒にてご返送下さい。

アンケートの集計結果

性別	回答数	%
1. 女性	21	52.5%
2. 男性	19	47.5%
無回答(17)		
回答数	40	100.0%

年齢	回答数	%
1. 20～25歳	1	1.8%
2. 25～30歳	1	1.8%
3. 31～35歳	2	3.5%
4. 36～40歳	4	7.0%
5. 41～45歳	11	19.3%
6. 46～50歳	4	7.0%
7. 51～55歳	9	15.8%
8. 56～60歳	3	5.3%
9. 61～65歳	8	14.0%
10. 66～70歳	6	10.5%
11. 71歳以上	8	14.0%
回答数	57	100.0%

佐賀市居住歴	回答数	%
1. 0～5年	7	12.7%
2. 6～10年	5	9.1%
3. 11～15年	3	5.5%
4. 16～20年	6	10.9%
5. 21年～25年	7	12.7%
6. 26～30年	5	9.1%
7. 31年以上	22	40.0%
無回答(2)		
回答数	55	100.0%

職業	回答数	%
1. 会社勤務	11	20.0%
2. 商工自営	5	9.1%
3. 農業	1	1.8%
4. 主婦	15	27.3%
5. 学生・院生	0	0.0%
6. 公務員	3	5.5%
7. 退職	10	18.2%
8. 会社経営	2	3.6%
9. その他	8	14.5%
無回答(2)		
回答数	55	100.0%

市民参加の経験	回答数	%
1. これまでも市民参加について関心があった	17	30.4%
2. 活動は特にしていないが市民運動やボランティア活動などの会員である	5	8.9%
3. 市民運動やボランティア活動に積極的に参加してきた	20	35.7%
4. その他	14	25.0%
無回答(1)		
回答数	56	100.0%

1) あなたが「佐賀市のまちづくりを考える会」に参加された動機は何ですか	回答数	%
1. 日頃から個人的に佐賀市のまちづくりに不満を持っていたから	6	10.5%
2. まちづくりの過程に参加することが面白そうだったから	6	10.5%
3. まちづくりには市民の参加が必要だと思ったから	26	45.6%
4. 市民からの公募という佐賀市の考えに共鳴して	13	22.8%
5. その他	6	10.5%
回答数	57	100.0%

2) 実際にワークショップの作業に参加して、このような方式のよさとして最も感じたことは何でしたか(2つまで)	回答数	%
1. 参加者の意見が自由に交わされておもしろかった	39	68.4%
2. 班単位の活動が有益だった	13	22.8%
3. 具体的な課題に取り組んで充実感があつた	15	26.3%
4. 市側から様々な情報提供があつてよかった	10	17.5%
5. 広用紙に書き込んでいく方法がよかった	6	10.5%
6. 意見の取りまとめがうまかった	4	7.0%
7. その他	12	21.1%
回答数	57	

3) 今回のワークショップ方式について、どのような点に不満がありましたか	回答数	%
1. 不満はなかった	16	28.1%
2. 不満があつた	35	61.4%
3. わからない	6	10.5%
回答数	57	100.0%

4) ワークショップの作業の成果である報告書について満足していますか	回答数	%
1. 満足している	24	43.6%
2. 不満である	21	38.2%
3. わからない	10	18.2%
無回答(2)		
回答数	55	100.0%

5) 市民参加について、今後佐賀市はどのような施策をすべきだとお考えですか(複数可)	回答数	%
1. 「佐賀市のまちづくりを考える会」を恒常化し、報告書の内容の実施状況を報告すべき	29	51.8%
2. 佐賀市総合計画策定の作業以外でも市民参加の方式を広げるべき	34	60.7%
3. 市民参加条例のような条例をつくり市民参加の制度化を図るべき	16	28.6%
4. 地域に常設の市民参加の組織を設けるべき	19	33.9%
5. その他	15	26.8%
無回答(1)		
回答数	56	

6) 今回「佐賀市のまちづくりを考える会」に参加して、全体として最もよかった点1つをお答え下さい	回答数	%
1. 佐賀市の行政への理解と信頼が高まった	5	8.8%
2. ワークショップ方式のおもしろさが経験できてよかった	4	7.0%
3. いろいろな市民の意見が聞けて有益だった	25	43.9%
4. 市民と行政のパートナーシップのきっかけができた	20	35.1%
5. その他	3	5.3%
回答数	57	100.0%

7) 反対に、全体として今回の市民参加で不満に感じた点はありませんか	回答数	%
1. 不満はない	19	35.8%
2. 不満はある	29	54.7%
3. わからない	5	9.4%
無回答(4)		
回答数	53	100.0%

第2章 市民参加の一手法について

～佐賀市総合計画策定における市民ワークショップを事例として～

本章は、第95回佐賀地域経済研究会（2001.2.9開催）においてなされた（財）九州経済調査協会研究員の内田和実氏の報告内容をテープおこししたものである。

はじめに

私は福岡市にいます（財）九州経済調査協会の内田です。今回、佐賀市のワークショップをお手伝いしましたが、私どもがやったことといたしますと、実は、何もやっておりません。ワークショップの参加された市民の方々に協力したのが私達の仕事です。

私どもは、これまでにいくつかのワークショップを1つの市民参加の手法して行ってきましたので、経験論的な話になりますが、しばらくお付き合いいただければと思います。

本日の報告は、まずは一般論の話をし、次に実際の佐賀市におけるワークショップの仕組みはどうであったのかという大きく2つに分けてお話ししたいと思います。

1. 市民参加の一手法として

（1）社会的背景

はじめに、今日のまちづくりを進めるにあたって考えるべき社会的背景についてですが、企業立地の減少やリストラの進展というように、近年、外から企業を誘致するような時代、そして誘致した企業の発展を望むような時代ではなくなってきました。域内の諸企業にも結構厳しい景気状況ですし、それに加えて、行政の財布の中身もなくなってきました。しかし、住民のニーズというのは多様化・高質化してきていますので、それに対するサービスとしてはどういった形がとられなければならないのかという問題があります。地方分権の流れの中で、いかに地域の住民を巻き込みながら、住民に地域内での地方分権をどう進めていくのかという2つの視点が地方分権にはあるのではないかと思います。

このような社会的背景から考えますと、市民団体、ボランティアやコミュニティー・セクターといった地域を構成する今の時代のパートナーシップをうまく結成して、企業等からの資金を引っ張り出しながら地域の環境を創造していくという仕組みが、日本で、佐賀市でできないものかという問題意識がでてきます。今までの「外部依存型のまちづくり」から「内発的なまちづくり」「内発的な産業振興」へと大きく方向性が変わってきているということが背景としてはあるのではないかと思います。

(2) ワークショップとは何か

以上のような社会的背景を踏まえて、まずはワークショップとは何かですが、一つの定義を紹介すると「ある目的達成のために異なった立場のさまざまな人々が、継続的に集まって行う共同作業。共同作業を通して対象である環境や施設、さらには風景などについて計画や保全の案を作成する。提案をするだけにとどまらず、実際にその提案した施設などを建設するところまでを共同で行う場合もある」と言われています¹。しかし、ワークショップと一口にいっても、いろいろなレベルのワークショップが実際行われていて、それを私なりに3つの段階に分けてみました。

実際のワークショップは、複数の領域にまたがりながらやられるものなのですが、まず1つはビジョン系です。これは総合計画でいうと基本構想に該当すると思います。「将来像（方向性や目標）の策定における共通理解・合意形成」を図るためのワークショップがそれにあたると思います。2つ目がプラン系で「将来像の実現に向けての手段、仕組みに関する共通理解・合意形成」です。今回の佐賀市のワークショップは、どちらかといいますとプラン系の性格が非常に強いものだったと思います。3つ目がアクション系で、これは非常に個別具体的な課題、例えば、公園を整備したり、整備だけではなく維持管理まで含めてその公園をどう展開していくのかというものです。施設整備も同様です。また河川の浄化についても、どのようにして市民と一緒に取り組んでいくのかというようなことです。このような非常に具体的な問題解決に向けて、現実をいかに変えていくのかという基本的なことですが、そのための手法としてのワークショップがあります。特に1992年の都市計画法の改正以降、都市計画分野でアクション系のワークショップがとても盛んになっています。しかし非常に難しい点は、抽象度の高い総合計画の策定の段階で、どこまでアクションに繋がっていくのか、このことについては後でお話させていただきますが、いかにプランを実現していくのかということです。そこで、プラン系を中心にした今回の佐賀市のワークショップの内容が、いかにアクション系の段階で実践されていくのかが課題だと思えます。

(3) 新しいまちづくりの主体

次に新しいまちづくりの主体をどう育てていけばよいのかについてですが、これはどうしても欠かせない重要な点ではないかと思えます。私はさまざまな地域のまちづくりの状況を見てきています。例えば四国の内子（うちこ）町、ご存知の方がいらっしゃるかもしれませんが、ここは市民が非常に意欲的にまちづくりを実践している町です。それは既存のまちづくりの仕組み、自治会長から区長、そして地域住民という縦の系列で町並み保存というまちづくりが行われてきたのではなくて、町役場の岡田さんという方が一軒一軒口説いてまわって、既存の住民の組織関係を全く無視して、町の歴史的な保存を呼びかけました。その結果、それまで観光客など全く見向きもしなかった町が、今では年間50万人を超える観光客が来る町になりました。私は、年末に内子町にちょっと遊びに行きましたが、その時非常に印象的だったのは、岡田さんが「既存の組織体系のまちづくりからいかに脱皮して、新しいまちづくりの主体を発掘していくのか、誰が主体になるのか」ということが

非常に重要である」と言われたことです。縦の行政組織である国→県→市町村、それに住民組織にもまた縦の仕組みがありますが、そうした中でまちづくりをやらうといっても、全国画一的な幾何学的なまちづくりにならざるを得ないのではないのでしょうか。だから、こういった縦の系列、あるいはまちづくりは行政の仕事だという意識を住民からいかに脱皮させるのか、そういうところが重要ではないかと思います。かなり独断と偏見がある極端な話になるかもしれませんが、従来では、行政主導による施策の立案・執行、それに従ってまちづくりの推進という形であったものが、市民と行政のパートナーシップの確立によるまちづくりの推進という形になっていくと思います。この場合の市民というのは、従来の組織である自治会長やPTA会長、商工会の会長さんといった方々ばかりではなく、新しい発想を持った新しいまちづくりの主体、意欲と能力のある市民も一緒に行政と手を結びながら新しいまちづくりを進めていくのではないかと考えています。縦と横の関係を横と横の関係にして、市民も行政も共に汗をかきながらまちづくりをしていくということです。

(4) 事例紹介

①下関市の場合

3年前に下関市で地区別ワークショップというのを開催させていただきました。下関には長府という歴史的な町並みが残されているところがありますが、市の総合計画策定の担当者に、偶然、長府地区でワークショップを経験されていた方がいまして、私どもにワークショップ形式で市民から意見を聞くことを提案されました。よく市民の意向を把握するために地域住民懇談会（以下、懇談会）を開催して、その中でアンケートを実施したりするのですが、そういった従来の懇談会ではなく、ワークショップ形式でやらうということでした。昼間は皆さん仕事があるので平日の午後6時半ぐらいから、中には土曜日もありましたが、8会場で地区ごとに3時間ほどのワークショップを行いました。参加者は佐賀市のような公募形式ではなく、市から全13地区ごとに自治会の会長や商工会、PTA、老人会、文化活動等で活躍されている方など各15名程度を選んでもらって、地区別まちづくりワークショップへの参加を依頼しました。ですから、集まってきた人達は個人としてではなく、団体の代表として参加されていたので、自分の地区の意見を反映するという意気込みが強かったようです。ワークショップのテーマは、市の将来の都市像と、13地区それぞれが目指すまちづくりとその方向性についてでした。各地区ごとに3つの班を作り、それぞれ「都市整備・交通対策」「産業振興・観光対策」など8つの項目について意見を吸い上げる形で実施しました。

例えば吉田地区についてですが、ここは一番北側の奥のエリアなので「総合病院を造って欲しい」や非常にユニークな観光施設である「東行庵の整備をして欲しい」など、地区の特性はあるのですが基本的には市に要望をする内容が多くありました。彦島地区は、割と産業が多く、南風泊（はえどまり）というフグの水揚げ日本一という観光資源を持っています。そこで新たに、大分県の臼杵のような歴史的資源をPRしていこうかということでした。また、三菱造船や三井化学などの企業が立地しているので、そうした地域特性に応じた意見・要望というものもありました。

このワークショップは1回だけで、懇談会に変わってワークショップという手法を試みたという程度に考えてもらえればいいかと思います。メリットとしては、従来の懇談会に比べるとやはり「参加者の方のモチベーションが高い」というのがあげられます。従来の懇談会では公民館などに、どなたでも自由に集まっていたいて実施するので、参加意識にかなりの温度差があります。しかし、下関市のワークショップ形式の場合には、それぞれ地区の代表という形で選出してもらいましたので、非常に参加意識が高かったです。ワークショップでは、付箋紙にそれぞれの意見などを書いてそれを広用紙にベタベタ貼る作業が多いのですが、そういった作業も違和感なくされ、そこで出された意見は非常に幅広くきめ細かいものでした。従来の懇談会では、もっと浮いた論議に終始しがちです。実は私、懇談会に出席したことがないのであまりいえないのですが、懇談会では声の大きい人の意見に振り回され易いということを聞きます。ところがワークショップ形式では、参加者全員の意見が十分に反映されますし、内容も多様で地区別の特徴も把握し易いというメリットがあります。その後のアンケート調査の「ワークショップに実際に参加してどうだったか」という質問に対し、非常に満足度が高いという結果が出ました。また、今回は一過性でしたが、今後本格的・実践的なワークショップへと進展する可能性は無きにしも非ずという意見がありました。デメリットとしては、各地区の代表者に参加していただいたからだと思うのですが、それぞれの地区あるいは団体の意見を反映させるような要望が非常に多かったということです。そのため、議論の質的な成果という点では、大きな進歩はなかったのではないかと反省も含めて思いました。また、準備に手間がかかるという点もありました。これは成果の割には準備に手間がかかったということでしょう。

②前原市の場合

別の事例として、前原市で実施されたテーマ別ワークショップがあります。前原は私の担当ではありませんでしたが、私ども九経調がお手伝いさせていただきました。

前原での参加者は「前原市まちづくり百人委員会制度実施規程」の第4条に従って、一般公募と各種団体あるいは学識経験者などで、ちょうど佐賀市と下関市の間ぐらいの構成、公募半分と代表半分という参加者の比率でした。ここでのまとめ方は佐賀市とあまり変わらないのですが、「まちづくり百人委員会」という委員会を作り、その中に6つの部会「都市づくり部会」「環境づくり部会」「安心づくり部会」「人づくり部会」「産業づくり部会」「未来づくり部会」を設けました。検討内容は、部会のテーマについての現状認識、今後の手段・方向性、それに市への施策提案です。そして佐賀市では実施しませんでした。テーマに関連した施設等の視察がありました。佐賀市でも、最初に部会ごとに別れて視察などのフィールド・ワークを取り入れても良かったのかなあと考えています。

各部会のまとめ方ですが、それぞれの部会でテーマを3つに分けて、例えば安心づくり部会の場合は「保険・医療・保育班」「高齢化対策班」「地域福祉班」の3つの班に分けて、テーマごとに現状に対する評価とその評価理由、それと意見・提案つまり「じゃあ、今後どうするのか」「そのような現状をどうしたらいいのか」ということを検討しました。この場合、地区別の特徴というのはかなり薄れてきますが、分野ごとの細かな現状と課題、

そして要望や提案が現れてきます。市への「こういうことをやったらどうか」という提案がなされているという点は評価できると思いますが、いざ「誰がやるの」というところが明確にならなかったように思います。

2. 佐賀市の市民ワークショップについて

(1) ワークショップの概要

では本題に入りまして、佐賀市の総合計画策定における市民ワークショップについて触れていきたいと思えます。今回の佐賀の市民ワークショップの重要性、これは今までに紹介した他のワークショップの位置付けとそれほど大差はなく、基本的には市民の意向を把握するためというのですが、どのように実施するのか、そして、総合計画の中にどのように結び付けていくかという所が肝心だと思います。総合計画には、まず基本構想と基本計画が必要ですが、市民ワークショップとは基本計画での結びつきが一番強くなります。ワークショップでまとめられた意見や提案が、基本計画のそれぞれの項目にきちんと取り込まれているかどうか、またどういう理由で不採用になったのかなど、さまざまな形でワークショップの成果が基本計画に反映されます。

佐賀市の場合には「教育文化部会」「市民福祉部会」「生活環境部会」「産業経済部会」「都市づくり部会」の5つの部会がありました。このうち、都市づくり部会以外は割とマニュアルに沿った同じような形で進めました。というのは、都市づくり部会においては、非常に参加者のモチベーションが高く、参加されていた都市工学専門の佐賀大学の先生やそのスタッフの方からの多大なご努力もあって、他の部会と若干違ったやり方で課題やかなり細かな部分のアイデアまで出され、まとめ方もユニークでした。

各部会とも4回の開催を予定していました。初回に全体会と部会を開き、2・3回目は部会のみ、そして最後は部会と再度全体会を実施するというものです。また5部会とは別に、これは市の方でお世話をしていただき、私どもは全くノータッチだったのですが、小・中学生を対象にした「夢づくり部会」というのを作りました。参加した小・中学生に共通のテーマ①佐賀市の「ここが好き」・「ここがキレイ」、②「佐賀市をこんなまちにしたい！」で作文を書いてもらいました。これらのアイデアについては、5部会のコメンテーターとしてお願いしていた佐賀大学の先生方や各部会の部会長・副部長さんにご検討いただきました。

私どもとしては「私達が進める都市計画というものはこういうもので、従来の形に捕らわれずいろいろな形で進めていきましょう」という話をしてワークショップを進めさせていただきました。5つの部会にはそれぞれ3つの班に分かれてもらって、班毎に現状と要望を書き出してもらいました。都市づくり部会の場合には、テーマ毎に議論した方が内容が深まるのではないだろうかということで、各班ごとに検討するのではなくて4つのテーマ「中心市街地の活性化」「交通問題」「歴史的環境の活用」「土地利用・都市施設」に分かれて市民と行政の役割分担などを比較されました。大きな地図に黒がよいところ、赤

が悪いくところといったように色分けして、そこに具体的に意見などが記入された付箋紙を貼って、視覚にも訴えながら試行錯誤されていました。

部会によって若干人数の多い少ないはありましたが、それぞれの班は6人前後で、どの班からもかなりのご意見をいただきましたので、1度も意見を出すことができなかったという方はいらっしゃるのではないかと思います。1回目と2回目の部会で「こんなまちになっている」「こんなまちになってほしい」という現状認識と将来展望をそれぞれ提示していただきました。3回目と4回目ではそれぞれの班が提示した意見をどういうふうに部会としてまとめるかという作業でした。班ごとに異なったテーマで話し合ったり、3班ともテーマは同じでもそれぞれ異なった計画を練っていたりなどしていましたが、そのまとめの作業でも私どもは「こういった枠組みではどうですか」というだけで、実際に作業を進めていくのはそれぞれの部会長さん、副部会長さんでした。

(2) 市民福祉部会を例にして

市民ワークショップの報告書には成果や結果だけが載っていますので、それまでのプロセスはなかなかご理解いただき難いかと思います。そこで、私が担当しました最初の全体会とその後開催された市民福祉部会について、どのようなことを実施したかという内容を紹介します。

最初の全体会では「ワークショップとは何か」や「ワークショップ形式のメリットとしては」など、今日の初めに皆さんにお話したようなことを参加者の方にも話しました。そして、具体的な進め方については「あくまでも進行するのは会員の皆さんです」と説明し、2回目以降の各部会の活動については、「私ども事務局はこういったことをやったらどうですかというような進行のお手伝いをします」ということを伝えました。そして「1回目は全体会と部会、2回目は各部会で“現況を把握し、課題を明らかにする”、“何をしたら良いのかについてアイデア出しをする”という作業をしてもらいますが、作業方法としては、広用紙を準備して、これに付箋紙を使って、それぞれ班のメンバー6～8人の方に意見を出し合ってもらおうという形で進められたらどうですか」ということを提案しました。「3回目では、2回目に班ごとに出された多くの意見を、部会としてまとめる作業をしていただきます。もちろん、2回目に出なかった意見を加えても構わず、まとめ方の例をお配りしますが、これはあくまでも例としているだけで、実際は部会にお任せするという形です。4回目は3回目を取りまとめをもらったものをもとに、事務局で作成した取りまとめ案について確認をしていただき、修正等がある部分については、全体会の中で口頭で発言していただくという手順です」というような流れをまず最初の全体会で話させていただきました。

全体会の後、それぞれの部会に別れて部会の進め方などについて検討していただきました。私が担当した市民福祉部会では、まず自己紹介をしました。それから、市の福祉担当の方をお願いして「佐賀市の福祉などの概況について」話をしてもらい、参加者に現状を認識していただいて、市民福祉部会での検討分野の確認をしました。そして、部会長・副部会長さんを選出してもらい、次回の日程・内容等の確認をしました。3回目の部会の時、

「重点課題については“早急に”と“中長期的に”の2段階を設けて優先度の高い順にまとめたり、“市民は何をすべきか”だけではなく“市民がやるべきことと行政がやるべきこと”という形でまとめたらどうですか」という提案をさせていただき、意見をまとめる前に、方向性やどのようにまとめるかを勉強していただいてから、実際の作業に移ってもらいました。

(2) 市民ワークショップの成果

今回のワークショップのポイントは、事務局から枠組みや進め方を提案させていただきますが、それについては各部会の合意によって最終的に決定していただくというところです。意欲や能力のある方が参加されていますから、あまり事務局がでしゃばりすぎてもどうかと思います。しかし、結果的には私どもがでしゃばるよりも優れたものを作っていたのではないかなと思っています。確かに、コメンテーターや取りまとめ役としてそれぞれの会長さん、副会長さんには、大変ご苦勞をおかけしました。前原市と同様、総合計画策定に向けての新しい形ではないかなと思っておりますが、「市民がやるべきこと」と「行政がやるべきこと」という役割分担を明確にさせた部分というのが新しいのではないかなと思っております。

最後に結果についてですが、体系的に数多くの提案あるいはアイデアが出されたことは評価できると思います。ただ課題としては、それらを具体的なまちづくりのアクションにどう結び付けていくのかということと、行政・市民との情報交換の場の必要性というのがあちらこちらの部会で言われていたのですが、それをどう実現していくのかということです。

また、それぞれの部会の意見を見ていきますと、「教育」「福祉」「生活環境」などは割と市民の感覚でわかるのですが、「産業」となると弱い部分があるのかなという印象があります。市民の視点から見た産業振興はどうあるべきかという意見は非常に非常出色でその点は評価できているのですが、産業経済界のあり方といいますか、実際に産業に携わっている方などを巻き込みながら、もっと違ったやり方があったのではないかなという印象をもちました。例えば、重点課題にある「シニア・障害者タウンへの模索」では、私でしたら健康産業の振興など、福祉的な視点で考えるのではなくて、医療や健康産業をどう振興するのかという問題で捉えます。佐賀の場合、非常に食品産業が多く、それを無視して単に生活関連産業を振興させるのかということがでてきますが、産業振興の場合、佐賀の強みは何なのかということ、他の地域にはなくて非常に優先的に振興させていくことができる産業、そしていかに周辺にその効果を波及させていくのかという視点が産業振興の場合には重要ではないかなと思います。こうした核になる部分をどこに持つていくのか、そして弱い部分はそれに連携すればいいわけです。それと、集約型産業など知的で創造的な活動を必要とする産業の振興を佐賀市で推し進めながら、それらが及ぼす環境の中で産業や経済を培っていかうというものだと思います。集約型産業といわれる情報産業、あるいは製造業の頭脳部分をいかに振興していくのかという視点が、私から見ると若干欲しかったかなあと思いました。このあたりを具体的にどのように取り込んでいくかという

ことになれば、やはり実際に産業に携わっている方の意見を聞きながら進めた方が、特に産業経済部会ではもっと成果が出せたのではないかという気がします。市民の意見というのは、生活関連産業は暮らしていく上では必要ですが、生活関連産業は消費財を作っている産業で、要するにニーズとのギャップをどう埋めていくのかということです。市民の評価・ニーズをどのようにして現場にフィードバックしていくのかという方式について、佐賀市で確立することができれば、こういう視点は農業の場合にも当てはまりますので面白いのではないかと思います。農業のような第一次産業と生活者というだけではなくて、製造業などの産業についても同じ域内の生活者のニーズに合うような製品をいかに展開・提供していくのか、それでうまく産業振興に結びつけるのかというような報告書を作っていないものだろうかと思いました。

予定よりもちょっと早いですが、これで私の話は終わりにしたいと思います。

¹ 「風景デザイン～感性とボランティアのまちづくり」進士五十八・森清和・原昭夫 他著、1999年、学芸出版社

第3章 「佐賀市のまちづくりを考える会」の部会長・

副部会長との懇話会記録

本プロジェクトでは、「佐賀市のまちづくりを考える会（以下、考える会）」の部会長・副部会長を招いて、今回のワークショップについて意見交換を行うべく、下記の要領で懇話会を行った。なお、考える会は5つの部会（教育文化部会、市民福祉部会、生活環境部会、産業経済部会、都市づくり部会）が設けられているが、諸般の事情で参加いただいたのは、生活環境部会と都市づくり部会から1名ずつ、計2名であった。

日時：2001年4月21日（土）10時～13時

場所：佐賀大学経済学部地域経済研究センター

出席者：園部節子（生活環境部会長）、矢ヶ部嘉子（都市づくり部副会長）、
蔦川正義、畑山敏夫、長安六、池田智子

当日は、まず自己紹介の後、アンケートの集計結果の報告がなされたが、その内容については第1章に掲載しているのので、本章では省いている。その他、佐賀市のまちづくりに対する思いなども話し合われたが、以下には、今回のワークショップに関する部分のみ掲載した。

園部（以下、園）：ワークショップ方式は初めてだったのですが、あれは短い時間内にいろんな意見を出してまとめるという方法なんだなあと思いました。ただ、私達にとっては、時間が足りなくて、部会を予定以上にもったり、興味あるところはそれぞれ自発的に調べて提案したりしてきました。

特に家庭から出る生ごみの堆肥化については、ぜひ実現して欲しかったので、導入されている自治体に出向いたり、インターネットなどで全国の事例を調べて資料を取り寄せたりしました。そして、このことについては、皆さんに了解して戴いて、部会の意見として発表しましたが、それ以外の課題についてはなかなかまとめられませんでした。

まとめるというのは多様な意見があるから難しいですね。だから、生ごみの堆肥化システムの導入については、集中して調べてまとめる人がいたのでよかったのですが、他のところはちょっと言っぱなしとか、詰められませんでした。最初から部会の回数が4回で、いつまでに提案を出さなきゃいけないというスケジュールが決まっていて、それでは時間が足りませんでした。

生ごみの堆肥化について具体的に提案できたことには満足していますが、他の課題については、もっと皆さんと意見を出し合って、提案内容を詰めたかったです。それともう一つ、「絶対にこれを提案したい」という人にもっと任せて、調べてきてもら

えば良かったかなあとと思います。しかし、これは自発的にするもので、強制はできないと思っていましたから…。

薦川（以下、薦）：それぞれの部会では最初にこういうことを検討するという課題がボンとでて、それについて話し合われたのですか？

園：いいえ。まず、九経調の方が、とにかく今、佐賀で「これをやって欲しい」という問題点を出して、それを例えば「市民がやるべきこと」と「行政がやるべきこと」に分けて考えて欲しいということでした。

参加した人達には、これはぜひ市に言って取り上げて欲しいという思いで来られた方が何人かいましたが、私達は最初、ワークショップというのがどういうものかよくわからなくて、部会の中で、言いつ放しの部分がありました。でも、あれだけの時間で全てを議論しようというのは無理です。それぞれが日頃から問題意識を持っていないと、難しいと思います。日常から考えたり、情報を集めたりしていればもっと深く議論することができたのではないかと思います。それに毎月2回のペースで、部会の間隔もつまっていました。3月と4月だけで4回やると決まっていたから、部会で出た課題をもって帰って次回までに調べてくるという時間が足らなかったと思います。

ワークショップというのはいいい方法なんだなあと思いますが、もうちょっと全体の期間を2ヶ月ではなくて、4ヶ月とかにして、それぞれが自分はどうしたいという意見を持って参加すれば良かったんだろうなあと思いました。私達の場合は、九経調の方が会議の全体的な流れは導いて下さいました。

ただ、市の方から情報が提供されても議論ができなかったですね。行政の考えはこうであるという言い方で、そのことについて議論ができませんでした。つまり、行政は既に政策を決めているということです。行政と参加者でもっと議論をしたかったですね。

矢ヶ部（以下、矢）：私は、都市づくり部会でしたが、抱えている問題の範囲が広すぎました。最初に「佐賀の良いところ、悪いところを出してください」と言われたので、それぞれいろいろな問題が出ました。しかし、あまりにも幅が広いから、部会の中でさらに4つのグループ（中心商店街の活性化、交通問題、歴史的環境の活用、土地利用・都市施設）に別れましょうということになりました。

部会長さんが佐大で建築を専門にされている三島先生でしたので、その方が大活躍してくださいまして、かなり専門的なところまで九経調の方たちとやりとりをしてくださいました。

他にも、お年寄りから若い方までいろんな方がいらっしやいまして、お顔がみんなそれぞれ見えて、私も長く佐賀に住んでいますけど、「えっ、こんな方がいらっしやるんだ」と思いました。さまざまな方のご意見を聞くことは滅多にありませんしね。

畑山（以下、畑）：いろんな幅広い意見が出るのはいいのですが、具体的に課題設定し

て、議論を深めていく時には、その議論はうまくいっていましたか。

矢：そうですね、お年寄りの方がかなり意見を出されていました。みんなそれぞれの意見をよく聞いていました。

園：私達の部会では、ほとんどみんなごみに興味があったので、テーマごとに分かれることが難しかったですね。女性が多かったからかもしれませんけど。

池田（以下、池）：このワークショップでは、最初から5つの部会に分かれていましたが、そのことについてはどう思われますか。

矢：私は、教育やまちづくりに興味があったので、両方に意見があるんだけどなあと思いました。応募の時、第3希望まで出すことができましたが、ほとんどの人が第一希望に入っています。また、部会を越えた意見交換をする機会があるのかなあと思っていましたが、最後のまとめの時くらいでした。しかし、その時間も、意見を言い合うようなものではなかったのですが。

長：1つの部会のそれぞれの課題がよその部会の課題にも関わってきますよね。しかし、100人近い集まりですから、全員が一堂に会して、あれこれ言うのは難しいと思います。でも最初から分けなくて、もう少し緩やかな形にしておいて、それから、都市づくり部会でグループ分けされたように、出てきた課題によってグループ分けしていった方が良かったかなあという気がします。

矢：そうですね。私も最初、どの部会に入っているかわからなくて、いろんな意見を聞いて、都市づくり部会に決めました。しかし、あんまりテーマが広いので、三島先生のような専門の方に任す部分がありました。

一つ一つ、全体を見ているということではすごくよかったですのですが、今からこれを深めていったらいいという段階で終わった感じがしましたね。問題提起が多くて、問題が出たことはすごくよかったですのですが、それを深めるにはちょっと時間が足りなかったという感じはしています。だから、このようなワークショップが制度的に続くと私は思っていたのですけれども…。なんとなく、市はご自分たちのために「早く何とかして欲しい」というのがあったのではないかという感じはしましたね。

畑：報告書にある「市民がやるべきこと」と「行政がやるべきこと」の分類は自分たちで考えられたのですか。

園：それは最初からです。だから、なぜそういうふうな分け方をしないといけないのかなあと思いました。

矢：私も、最初から、なぜ市民と行政を分けて考えなければいけないのか、今だにわか

りません。だけど、よその部会も全部そのような分け方をしていたので、そういう方式なんだと思っていました。

それと「早急にやるべきこと」と「中長期的にやるべきこと」というように分けて下さいということもおっしゃったのですが、そういうのは自ずと出てくるのではないかと思いました。今すぐできるとか、緊急の課題だとか、自然とわかってくるのに、なんで最初からそういうふうに分けて報告書に出さなければいけないのかなと私は納得いかないながらも、これもひとつの方法なのかと思いながらやりました。今でも、その理由を聞きたいくらいです。

畑：この5つの部会について、4回の話し合いで報告書を出すというのはやはり無理ですね。それぞれが大きな課題です。

矢：日常から調べたり、問題意識持っている人だと、短い期間でも具体的な提案ができたかもしれないと思うのですが、とにかく、参加者の間には、具体的に何か提案したいという思いはありました。

もしかすると、さっきおっしゃったように最初から5つの部会というのではなくて、大まかにグループ分けをしておいて、それから自主的に持ってきた課題を整理していったら、日常的にそういう研究をしたり、いろんな問題意識を持った人たちが集まったのではないかなと思います。

長：結局、総合計画を作るための既存の枠があって、それに応じて部会を分けたことが、市と市民の間の感覚のズレですね。最終的にまとめる時に、市側はやりやすいしでしょうしね。

畑：2つぐらいの部会に所属しても良かったですね。

長：私は、産業経済部会に関わっていましたが、商業のことを話す時に、商店主の方が部会の中にいませんでした。先ほどのアンケート集計の報告にもありましたが、主婦など消費者の立場の人が部会の主流なんです。農業関係は団体の方はいらっしゃいましたが、商業の場合、当事者がいないので、具体的な話がなかなかできないのが現状でした。

矢：そうなんです。私達も都市づくり部会の“商業活性化”で、商店街の方がほとんどいらっしゃらなかったんですよ。だから、理想論みたいなもので、具体的なことが話せませんでした。理想論は理想論で楽しかったんですけどね。

例えば、佐大の一部を唐人町の空き地に移して、学生アパートも建てて商店街をもっと活性化したらいいとか、とてつもない、商店主が聞かれたらびっくりするような、逆に面白い意見が出て、私もそれはそれでいいなあと思いました。佐大をもっと街中におけば、開かれた大学にもなるし、学生さん達の活力を商店街にいただけるしなど、皆さん、生き生きと意見を言われていました。自分の意見を自由に言える場ができて

よかったとすごく喜んでいらっしやいました。

薦：確かに自由に討論していると、ひょっこり新しい考えが浮かんできたりしますよね。ワークショップの面白さでしょうね。

池：いろんな人達と顔見知りになれたというのはすごくよかったと思います。

矢：そうですね。お顔が見えたということがよかったですね。私が行くところは、大体、女性ばかりの所が多いですね。男性と触れ合うということは少ないのです。だから、このワークショップでは男性が多くて、私はうれしかったです。しかも、年齢の幅が広いでしょう。おじいさんの意見も聞けたし、若くて現役でバリバリやってらっしゃる人の意見も聞けたし、三島先生がドイツに行ったらしたお話も聞けたし、すごく楽しかったですね。ありがたいと思いました。佐賀に、イギリスのパブのような女性も男性も一緒にいて、お互いの意見を自由に言い合うことができる場所が欲しいですね。

畑：この報告書をつくる際、何か意見など言えたのですか。

園：部会ごとに私達がまとめたものを、市と九経調の方で再度まとめられて報告書になりました。一応、自分たちの意見は取り上げられています。

畑：具体的な提案が報告書の中で削られているという意見が、アンケートの中に多数あったのですが、どうしてでしょうか。

矢：それは「佐賀市の考える会」の報告書ではなくて、佐賀市総合計画の「佐賀市の考える会」提言取り扱い集のことでしょう。それには、ワークショップの提言項目に対して、市総合計画における対応、問題点、反映できない理由などが掲載されていますから。

薦：すると、完成された総合計画には、ワークショップで検討されたことが全部入っているわけではないということになりますね。

園：市民はいろいろな意見を言いますよね。その中で、市は最終的に、これはできるとか、これは将来的に見てこういう方向でいこうなど、市の考えに沿ったものだけしか採用されないのではないかと思います。

私としては、まちづくりの方向性を提案したということで、後は、市や専門家の方々と、それを具体的にするにはどういう問題点があるかなどということを考えて欲しいと思います。提案したとおりにできないということ由市から言われても、それはそちらの事情というか、問題だと思えます。市は、できないということばかり言います。するつもりがあればできるという思いがあるから、私達は市に提案しているのに…。

畑：市がだめだといったことに対して、納得するような説明をする機会が習熟することがなければ、なかなか前に進みませんね。ダメなことはダメということは良いことなのですが…。

薦：部会長・副部会長の経験をこれからどうなさいますか。何か佐賀市のまちづくりのためにうまく展開させる予定はありますか。

園：ごみに関しては、今後もずっと関わっていきたいと思っています。特に、生ごみの堆肥化については、その後どうなったのかということを知りたいですね。

薦：どうも今日はありがとうございました。